國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

明治初期の西洋人による口語文典・会話書における可能動詞の取り扱い

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 杉松, 香苗
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001517

明治初期の西洋人による口語文典・会話書における可能動詞の取り扱い

特別研究生　杉　松　香　苗

論　文　要　旨

本稿では、主に明治初期の西洋人による口語日本語の研究･教育資料の中で「読める」というような可能動詞(かのうどうし)がどのように扱われているか分析する。調査対象とした文献は、馬場辰猪『日本文典初歩』、アストン『日本口語文典』、インブリー『Handbook of English-Japanese Etymology』、チェンバレン『日本語口語入門』、ブリンクリ『語学獨案内』、サトウ『会話篇』である。

アストンは当初、受身の形が可能の意味をもつとし、初版と２版では、第１活用の動詞の語尾の母音 - u を消して -eru を加えた形式即ち可能動詞も受身形と考え、可能の意味を持つという一般化をしていた。しかし、４版ではその考えを変え、特別な自動詞として取り扱っている。一方、インブリーは、可能を態として考え、日本語の可能態に受身と同形の「れる / られる」が接続するものと可能動詞の２種類あると考えている。チェンバレンは、可能動詞を自動詞としているが、動詞を変形して作るという点でインブリーと同じである。

また、インブリーとサトウの資料の可能の助動詞「れる / られる」と可能動詞の用例数の調査結果から、可能の助動詞「れる」と可能動詞は同程度に使用されていることがわかった。

キーワード：可能動詞(かのうどうし)　アストン　インブリー　チェンバレン　サトウ

1　はじめに

可能表現には、助動詞「れる / られる」を接続するもの、「ことができる」を接続するもの、「得る」等の補助動詞を接続するもの、「読める」等の可能動詞を用いるものなど、様々な表現形式がある。特に、可能動詞に関する研究は、可能表現の通時的な使用実態（神田 1961, 鷭岡 1967, 佐々木 1993, 小木曽 2002, 申 2003, 浅川 2018等）、可能動詞の成立についての考察（渋谷 1993, 青木 1996, 坂梨 2006, 三宅 2016等）など多くある。これらの研

究から、明治初期における可能動詞の使用に関連する指摘を以下にまとめる。

① 1800年から1870年にかけては既に可能動詞が発達している。武家語においては可能動詞が作品中にさかんに書き留められる段階にあり、町人語においても日常会話においては可能動詞が優勢になっている。「できる」による可能表現が一般化し、武家階層においては「することができる」がかなり用いられたと推定される。1875年から1910年の間は、「することができる」が一般に普及し、可能動詞が助動詞「れる / られる」の言い方を凌いでいる。（鶴岡 1967）

「名詞＋ができる」は大正以後は殆ど使われなくなっており（神田 1961）、２字漢字熟語は直接「できる」を接続する言い方が盛んになった（鶴岡 1967, 神田 1961）。

② 江戸時代末期（1860年代）の上層町人の間では、可能動詞の使用率は助動詞「れる / られる」及び「できる」よりも低く、可能表現の主流とはいえない。（浅川 2018）

③ 江戸後期には助動詞「れる」型がもっとも多く用いられるが、可能動詞も使用されている。明治大正期になると、可能動詞と「ことができる」が多く用いられるようになる。可能動詞、「ことができる」が優勢になった理由は、「れる」の解釈の弁別のためであろう。（佐々木 1993）

④ 可能動詞は18世紀中期頃から生産性をもって用いられるようになった。（渋谷 1993）

⑤ 江戸後期（1800年頃～）からあらゆる四段動詞から可能動詞が生成されるようになった。（青木 1996）

⑥ 後期江戸語の可能動詞は、語幹１音節からなるものが主流であるが、２音節のものも増加している。「否定形」をとって「状況可能」をあらわす場合が中心であるが、前期江戸語と比べると「状況可能」の「否定形」から「肯定形」へ、さらに「能力可能」へ拡張している。東京語になると語幹１音節の「否定形」で「状況可能」が主導しているなかで、「能力可能」の比率が高くなり、語幹１・２音節のものを問わず「肯定形」の可能動詞が増えている。「ことができる」は明治以後の東京語資料において大きく伸張をみせ、「状況可能」から「能力可能」への拡張が見られる。（申 2003）

可能動詞について、明治初期の西洋人はどうみていたのであろうか。米国長老教会宣教師インブリーはその著作『Handbook of English-Japanese Etymology』（初版 1880, ２版 1889：以下ハンドブック[1]とよぶ） において、日本語の voice（態）に受動態、使役態、可能態をみとめ、可能態として、助動詞「れる / られる」を用いた受身と同形のものと第１活用の動詞[2]に -eru が接続した形式の２種類を提示している。後者が可能動詞である。

本稿では、明治初期の口語日本語の研究・教育資料、特に英米人による著作において可

能動詞がどのように扱われているかについて調査し、用例の中の可能の助動詞「れる / られる」と可能動詞の出現状況を分析する。

2　分析対象の口語日本語の研究・教育資料

明治初期に出版されている、西洋人の口語に関する日本語研究・日本語教育資料から口語文典、会話書に注目し、その中の可能動詞に関連する記述をまとめ、比較、分析する。参照した資料は以下のものである。

○　馬場辰猪『日本文典初歩』(『An Elementary Grammar of the Japanese Language with Easy Progressive Exercises』初版 1873, 2版 1888, 3版 1904)

馬場辰猪はロンドン留学中に本書を刊行した。口語日本語の体系的な規則と習得のための練習問題からなる。Lord Houghton という英国人に献じられた教科書で、英語話者学習者の便宜を考えつつ作成された（金沢 2008)。初版がイギリスで反響を呼び、一定数の学習者が生まれた（金沢 2010)。

金沢（2008）では、日本人による初めての日本口語法の記述として山田孝雄が高い評価を与えていることを紹介している。さらに、馬場の口語動詞の3分類法について、推断をさけながらも、アストンの日本語動詞の分類法の影響の可能性について指摘し、馬場がアストン、サトウ等の西洋人日本語研究者の系譜上にあるであろうと述べている。このように、英米人のための日本語学習書として評価が高く、当時の西洋人日本語研究者と同様に口語日本語を体系的に記述しているので、分析の対象とする。本稿では、初版と2版をみる。

○　アストン『A Short Grammar of the Japanese Spoken Language』(初版 1869, 2版 1871, 3版 1873, 4版 1888)[(3)]

以下、『日本口語文典』とよぶ。

○　インブリーのハンドブック

宣教師会議において日本語学習用のテキストの一つにあげられている。宣教師の日本語学習の目的が翻訳や説教であったため、例文は丁寧体と普通体どちらかに偏ることのなく示されており、特に質問の文では丁寧体がほとんどである。序文での言及と語形変化表の比較から、サトウ、アストンの著作を参考にしていると考えられる（杉松 2018)。初版、2版ともに可能態についての主張に変更はない。本稿では、初版を分析対象とし、用例等を引用する。

○　チェンバレン『A Handbook of Colloquial Japanese』(初版 1888, 2版 1889, 3

版 1898, 4版 1907)

本稿では、大久保恵子編・訳(1999)を用いた。これは2版を対象としたものである。以下、『日本語口語入門』とよぶ。

○ ブリンクリ(1875)『語学獨案内』

英語学習用のテキストで日本語研究・教育資料ではないが、宣教師会議において日本語学習のテキストの一つにあげられており、参照する。

○ サトウ(1873)『Kuaiwa Hen, Twenty-Five Exercises in the Yedo Colloquial for the Use of Students with Notes』

以下『会話篇』と呼ぶ。序文に第2部の注釈に関してはアストンの『日本口語文典』に非常に多くを負っているとの記述があること、注釈で度々アストンの著書を参照するようにいっていることから、サトウは本書作成の上で、アストンの『日本口語文典』を参考にしていることがいえる。

3 口語文典・会話書における可能動詞の分析

3. 1 馬場辰猪『日本文典初歩』

動詞に5つのmood: Indicative Mood(直説法)/ Potential Mood(可能法)/ Subjunctive Mood(仮定法)/ Imperative Mood(命令法)/ Infinitive Mood(不定法)があるとのべている。可能法は、行動する能力を表現するとし、'I can see it or that' の訳として以下の例文をあげている。(1)bのように「〜することができる」も並記している。

(1) a. Watakusi wa sore ga miyemusu(ママ)

b. Watakusi wa sore wo miru koto ga dekimasu

可能法の作り方は、動詞の活用表に記載されている。「- Uで終わる動詞の第1活用」に対する可能法に対しては、「ik-emasu」、「-RU で終わる動詞の第2活用」に対しては「miru koto ga dekimasu」を用いて、時制別に活用を表にしている。「来る」については、第3の動詞としてとりあげ、「kuru koto ga dekimasu」でその活用を示している。第1活用の動詞に対しては、可能動詞を標準的な可能表現とみなしていたと考えられる。

『日本文典初歩』には練習問題がついている。金沢(2009)は、構成にオレンドルフ教授法の影響があり、練習問題の特徴としては、英語から直訳した不自然な日本語文であること、繰り返し練習を強調していることを指摘している。ここでは、可能表現についての練習に用いられた日本語例文を一部あげるが、初版には可能表現の練習がなかったので、2版から引用する。

（２）a. Ikemasu　　‘can go’

b. Iku koto ga dekimasu　　‘can go’

c. Konniti sibai ye anata wa ikemasu ka.

d. Hei, watakusi wa konniti sibai ye iku koto ga dekimasu.

e. Anata wa Nagasaki kara hayaku kayeru koto ga dekimasu.

f. Iye, watakusi wa hayaku kayeru koto ga dekimasen.

練習問題の各課では、（２）a,b のように基本的な動詞の形を英文と並べて示し、その下に（２）c,d,e,f のように理解の容易な日本語例文が20程度提示されている。次の課にはその表現に相当する英文が書かれているが、先に示された日本語例文とは異なるため、英文和訳の練習であろうと考えられる。

可能法の練習は、その過去形（ました）、未来形（ましょう / ますまい）の練習を含め CIII 課～CVIII 課まであり、以下の可能表現が含まれる文が繰り返し用いられている。

Miyemasu（見えます）/ Miru koto ga dekimasu（見ることができます）

Ikemasu（行けます）/ Iku koto ga dekimasu（行くことができます）

Yomemasu（読めます）/ Yomu koto ga dekimasu（読むことができます）

Kakemasu（書けます）/ Kaku koto ga dekimasu（書くことができます）

Kayeru koto ga dekimasu（帰ることができます）

Wataru koto ga dekimasu（渡ることができます）

Kosirayeru koto ga dekimasu（こしらえることができます）

Hanasu koto ga dekimasu（話すことができます）

Oide nasaru koto ga dekimasu（おいでなさることができます）

Goran nasaru koto ga dekimasu（ご覧なさることができます）[(4)]

用例数としては「～することができます」を用いたものが多く、「～することができます」の定着を重要視していることがわかる。現在の日本語教育のテキストと同様に、実際の使用状態を反映したものとはいえないと思われるが、少なくとも1888年の時点で学習者にとって「～することができます」という表現が、可能法を習得する上で適切な文型だと著者が認識していたと言えるであろう。全ての動詞に使える表現でもあり、現在の日本語教育にも通ずるものがある。可能動詞については、「行ける」「読める」「書ける」が練習問題で扱われている。

3．2　アストン『日本口語文典』

可能表現に関して、1869年の初版（§45, §46）と1871年の２版（§72, §73）の記述は同じで、受身動詞（passive verb）が可能の意味を持つとしている。受身動詞は、動作動詞（active verb）の終止形（present indicative form）の u を消して - areru を加えて作られると述べている。これは、助動詞「れる / られる」が接続したものである。

Miru　→　Mir-areru（見られる）
Korosu　→　Kros-areru（殺される）
Tadzuneru　→　Tadzuner-areru（尋ねられる）

いくつかの動詞は、語幹（root）[5]に -eru, -yeru を加えて動作動詞から派生される受身形（passive form）をもつとし、-eru, -yeru が接続するとき第１活用の動詞は、最後の母音を消すか ‘o’, ‘a’ に変わると述べている。例としてあげているのは、以下の動詞である。‘a’ にかわった動詞の例はない。

Kiku　→　Kik-o eru（聞こえる）
Miru　→　Mi-yeru　（見える）
Shiru　→　Shir-eru　（知れる）

これらは、受身というよりは、自動詞であると述べている。また、語尾が -areru, -eru となる受身形は、しばしば可能の意味を持ち、‘can’ の表現に相当すると指摘している。以下の例があげられている。

（３）a. Miraremashĭtaka?[6]　‘Could you see?’
b. Ikkō miyenŭ.　‘I cannot see at all.’
c. Ikareru de arō ka?　‘Will he able to go?’
d. Mairaremasenŭ.　‘I cannot come.’
e. Ikenŭ.　‘It cannot go, i.e. it is no use, it is no go.’

アストンは、第１活用の動詞の語幹の母音を消して -eru を接続するという可能動詞の作り方に相当することについては言及しているものの、「聞こえる」「見える」のような可能動詞とは言えない動詞を例としてとりあげ、それらを自動詞に近い受身と考えている。例文（３）の可能動詞の例は e で用いられた「いける」のみである。

1873年の３版（§72, §73）では、語尾が -areru の受身動詞が可能の意味を持つとし、語尾 -eru, -yeru を接続して作られる形として、「聞こえる」「見える」「知れる」があげられているものの、これらは初版、２版と異なり、単なる form と記され、受身形（passive form）とは呼ばれていない。従って、受身形が可能の意味を持つとしてあげられている例文（４）では、初版、２版の（３）と異なり、-eru の用例はない。

（4）a. Miraremashĭtaka?　　'Could you see?'

b. Ikareru de arō ka?　　'Will he able to go?'

c. Mairaremasenŭ.　　'I cannot come.'

1888年の4版では、§73に Passive or Potential verbs というタイトルで、受身動詞が可能動詞として扱われている。語尾が -areru のもののみが受身動詞とされているが、これは3版と同様であり、初版と2版でとりあげた「見える」「聞こえる」についてはこのセクションではとりあげず、§71 にこれまでの版にはない自動詞と他動詞の章を設け、自動詞として扱っている。そこでは、日本語と英語の自動詞と他動詞についての違いを述べ、「たつ / たてる」、「進む / 進める」等の自動詞 / 他動詞の例をあげた後、別個のクラスの自動詞として、以下の動詞を対応する他動詞とともに提示している。

Kireru, to be discontinuous（切れる）	Kiru, to cut（切る）
Ureru, to be saleable, to sell（売れる）	Uru, to sell（売る）
Miyeru, to be visible, to be able to see（見える）	Miru, to see（見る）
Kikoyeru, to be audible, to be able to hear（聞こえる）	Kiku, to hear（聞く）
Ikeru, to be able to go（行ける）	Iku, to go（行く）

ただし、「行ける」については、このクラスの自動詞が他動詞だけでなく自動詞からも派生されることを示していると述べ、「いけない」がよく使われるとコメントしている。

これらの自動詞は可能の意味をもつが、受身形と混同してはならないと注意しており，初版、2版の考えとは異なる。（5）は可能の意味をもつ自動詞の用例である。

（5）a. Tatenai.　　'I cannot stand. I do not set up.'

b. Betsŭdan hima ga toreru hodo no koto mo arimasumai.

'There probably won't be anything which will occupy any great time.'

c. Koko ja hanasenai yo.　　'We can't talk here.'

自動詞・他動詞については p.78に作り方にルールはないとの記述があることから、第1活用の動詞から生成されるという考えを改めたと考えられる。また、4版には §151に 'can, could' の日本語訳の例があげられているが、'I can go.' の訳として、「行くことができる」が「行かれる」とともに提示されている一方で「行ける」はなかった。

アストンは当初、受身の形が可能の意味をもつとし、初版、2版では、第1活用の動詞の語尾の母音 - u を消して -eru を加えた形式即ち可能動詞も受身形と考え、受身の形式が可能の意味を持つという一般化をしていた。4版では自動詞として取り扱っており、変形により作られるというような言及はない。

3．3　インブリーのハンドブック

１章でも述べたように、ハンドブックでは第１活用の動詞に -eru が接続した形式、即ち可能動詞について取り上げている。

動詞に「れる / られる」が接続した受身形（Passive）は、可能態としても使われるが、さらに第１活用のほとんどの動詞と第２活用の少しの動詞は、可能態として -eru の形（今の可能動詞）も持つとしている。活用別に可能の意味をもつ受身形と可能動詞の用例が表で示されている。以下に表中の用例を漢字仮名交じりで示す。具体的な可能動詞の作り方については述べられていないが、上記のように第１活用のほとんどの動詞がこの形をもつと述べていることから、可能動詞を特別なものとは考えていなかったと思われる。

＜第１活用＞	行かれる / 行ける	聞かれる / 聞こえる	継がれる / 継げる
	殺される / 殺せる	ぶたれる / ぶてる	死なれる / 死ねる
	結ばれる / 結べる	読まれる / 読める	切られる / 切れる
	売られる / 売れる	買われる / 買える	言われる / 言える
	縫われる / 縫える	思われる / 思える	
＜第２活用＞	得られる	開けられる	知らせられる
	捨てられる	食べられる	浴びられる
	見られる / 見える	借りられる	
＜不規則動詞＞	せられる	来られる / 来れる	

下線を付した「聞こえる」「見える」を除いた -eru の形を持つ動詞が可能動詞である。

２つの形は意味の上ではっきりと感知できるほどの違いもなく使われるが、違うときは、受身形と同形の「れる / られる」を接続した形は、law, duty, propriety（礼儀）, permission（許可）, willingness, feelings いわゆる精神的な能力（moral ability）に関して用いられ（Can に対応する May）、一方 -eru の形は、絶対的な、もしくは物理的な能力を表現するとしている。その違いを「売られる / 売れる」「聞かれる / 聞こえる」「見られる / 見える」を用いて説明している[7]。

可能態の使用について、「彼があることができる」、「彼があることがなされるようにする」と表現する方が、「彼がそうする」というよりも丁寧だと考えられているので、可能態や使役態は、単に礼儀正しくあるために時々使われると指摘している。

さらに、Can と Could は日本語で次のように表現されるとしている。

① 動詞の可能形（potential form）を用いる。

ここでの可能形とは上記の -eru の接続した可能動詞と「れる / られる」の接続した受身形のことを意味していると考えられる。

② 「こと」によって終止形に「できる」をつなげる。「できる」は名詞とともにも使われる。

③ can not は、「わけにはいかない」に終止形を接続することによっても表現される。

ハンドブックの例文で可能の助動詞「れる / られる」の用例と可能動詞の用例を元となる動詞ごとに以下に示す。「できる」「見える」「聞こえる」は可能動詞に含めない。可能表現かどうかについては、各用例に添えられた英訳も参考にして判断した。各用例の右にハンドブックに記載されたページ番号を記す。

全用例数は45で、元となる動詞の異なり語数は27である。

(6)(いる)

a. Kono heya wa samukute kaze wo hikadzu ni suwatte irarenai. p.193

b. Naku to koko ni irarenai yo. p.201

(7)(かかる)

a. Dare de mo shokuji chū ni kitara, shitsurei nagara o me ni kakarenai to iye. p.187

b. Dare de mo kitara, o me ni kakarenai to iye. p.93

(8)(とる)

a. Ii neko saye attara kono nedzumi ga toreru darō. p.161

b. Kono jimen wa it tan de kome ga ika hodo toremasu ka. p.108

c. Hommoku no oki de taisō sakana ga toreru sō da. p.178

(9)(なる) Motto shimatsu wo shinakereba, dō shite mo kanemochi ni wa naremasenu zo. p.34

(10)(泳ぐ) Kodomo no toki ni ham michi wo oyogeta. p.41

(11)(許す) Dō shite mo yurusaremasenu ka. p.138

(12)(見つける)

a. Takusan atta to omotta ga hitotsu mo mitsukerarenai. p.49

b. Akari ga nakereba dō shite mo mitsukeraremai. p.138

(13)(見る)

a. Are wa amari kawaisō de mirarenai. p.162

b. Yurushi wo ukereba ro no naka wo miraremasu ka. p.42

c. Fukiage no o niwa wa itsu miraremashō ka. p.42

(14)(言う) Ii yō wo saye shitte ireba, Nihongo de nan de mo iwaremasu. p.41

(15)(行く)

a. Ni jip pun no aida ni tetsudō made notte ikeru. p.175

b. Go ji jip pun made wa ikarenai. p.148

c. Itsuka no ato de wa itsu de mo ikaremasu. p.152

d. Yahari omaye mo ikarenai. p.198

e. To wo aketara, mina ga mada ikenai to itta. p.96

f. Kinō o tegami ga kitara, kiyō ikemashitarō ga. p.44

g. Han ji kan de asoko ye ikeru darō to omotta. p.49

(16)（参る）

a. Kinō fune ga tsukanakattara, mairaremasenu. p.201

b. Yūbinsen ga tsukanai uchi wa inaka ye mairaremasenu. p.151

(17)（借りる）Tonari kara karirareru ka mo shirimasenu. p.177

(18)（寝る）Hanshō ga naru to dō shite mo nerarenai. p.41

(19)（待つ）

a. Nagaku wa matenai. p.153

b. Han ji kan mataremasenu ka. p.170

(20)（知る）Tōri ni areba jiki ni shireru darō. p.200

(21)（着る）Kono kimino wa amari yogorete kirarenai. p.162

(22)（登る）Ima de wa dare de mo Fujisan ye noborareru. p.96

(23)（読む）

a. Denjirō de saye mo dzuibun kanji ga yomeru. p.162

b. Hitotsu hon wo yoriai ni yomemasenu ka. p.106

(24)（買う）Jū yen de wa kayemasumai. p.185

(25)（売る）

a. Seifu no menkiyo ga nakereba uraremasenu. p.42

b. Hōbō ye aruita ga dō shite mo urenai. p.41

(26)（泊まる）Ni san nichi yori nagaku wa tomararenai. p.204

(27)（発つ）Uten de tatarenakatta. p.192

(28)（飛ぶ）Sagi wa konna kaze ni mukatte amari hayaku tobenai. p.159

(29)（聞く）

a. Ano hito no hanashi wa amari kegarewashikute kikaremasenu. p.162

b. Watakushi mo kikaremasu ka. p.42

(30)（歩く）Ano kodomo wa totemo arukemai. p.138

(31)（眠る）Ano inu ga damaranai uchi wa dō shite mo nemurarenai.　p.138

(32)（来る）Futari to mo maneita ga dochira mo korarenakatta.　p.41

上記の用例数を表１にまとめる。第１活用以外の動詞については可能動詞がないため可能動詞の欄には斜線をひいた。( ) 内の数は、各用例のうち「ます」や終止形、「だろう」、「ましょう」で終わる否定表現でないものの数である。否定表現は、「ません」や「ませぬか」、「ない」、打消推量「まい」で終わるものである。

表１　ハンドブックにおける可能の助動詞「れる / られる」と可能動詞の用例数

動詞	れる / られる	可能動詞	計	動詞	れる / られる	可能動詞	計
かかる	0	2	2	泊まる	1	0	1
とる	0	3　(3)	3	発つ	1	0	1
なる	0	1	1	飛ぶ	0	1	1
泳ぐ	0	1　(1)	1	聞く	2　(1)	0	2
許す	1	0	1	歩く	0	1	1
言う	1	0	1	眠る	1	0	1
行く	3　(1)	4　(3)	7	いる	2		2
参る	2	0	2	見つける	2		2
待つ	1	1	2	見る	3　(2)		3
知る	0	1　(1)	1	借りる	1　(1)		1
登る	1　(1)	0	1	寝る	1		1
読む	0	2　(1)	2	着る	1		1
買う	0	1	1	来る	1		1
売る	1	1	2	計	26 (6)	19 (9)	45

第１活用の動詞の用例数をみると、可能の助動詞「れる」が15、可能動詞が19である。第１活用の動詞の異なり語数は、可能の助動詞「れる」を用いたものが11、可能動詞が12である。可能の助動詞「れる」と可能動詞両方の用例を持つ動詞は「行く」「待つ」「売る」である。可能動詞のみを２例以上用例を持つ動詞は「とる」「お目にかかる」「読む」であった。「行く」については、可能の助動詞「れる」も可能動詞も同程度用いられている。

可能の助動詞「れる / られる」は26例中20例が、可能動詞は19例中10例が否定表現である。「とる」の可能動詞は３例とも肯定表現で使われており、「行く」の可能動詞は４例中１例のみが否定表現である。

可能の意味をもつ「できる」の用例数は32である。可能の助動詞「れる / られる」、可能動詞よりも多く使われている。用例の一部を（33）にしめす。(33)c のような「～ことができる」という表現は16例あった。

(33) a. Ichi nichi ni jū jikan benkiyō no dekiru hito mo aru.　p.42

b. Itsu de mo tori ni agetara jibiki wo haishaku ga dekimashō ka.　p.133

c. Itsu made o machi nasaru koto ga dekimasu ka.　p.140

可能の意味をもたない「できる」には（34）のような完成 / 完了の意味をもつものがある。

(34) a. O heya wa mada sōji ga dekimasenu.　p.37

b. O ide nasaru made ni wa kitto dekite orimasu.　p.140

「行く」の可能動詞については、「いけない」の形で（35）のように可能の意味ではない用例があった。

(35) a. Motto ki wo tsukenakereba ikenai.　p.46

b. Akai no de mo kuroi no de mo ikenai.　p.102

c. Amari sake wo nonde wa ikemasenu.　p.107

「見える」「聞こえる」の用例の一部を（36）にあげる。

(36) a. Oto ga shita ga nani mo miyenakatta.　p.98

b. Kikoyeru tokoro ni o suwari nasai.　p.131

ハンドブックの p.120には、英語の形容詞で '-ble' で終わるものの多くが、自動詞か可能態で訳されるとの言及がある。ハンドブックに提示されているものを漢字仮名交じりにして、以下にあげる。

possible：できる	audible：聞こえる	portable：持って行ける
impossible：できない	knowable：知れる	legible：読める
credible：信じられる	habitable：住まわれる	edible：食べられる
immutable：変わらない	unattainable：及ばない	intolerable：たまらない
inexcusable：容易ならない	illegible：読めない	immoveable：動かない
incalculable：はかられない	inseparable：離されない	innumerable：数えられない
inevitable：逃れられない	insuperable：除かれない	irreparable：し直されない
sensible：よく分かった	unprofitable：損にならない	disagreeable：気に入らない
navigable：船の通られる	excusable：勘弁のできる	indefensible：言い訳のたたない

inconceivable：理屈にあわない　incontestable：論にならない

inadmissible：承知のできない　incomprehensible：訳のわからない / 合点のいかない

可能動詞が使われているものは、用例数として「持って行ける」「読める」「読めない」の３例（「知れる」を入れると４例）で、可能動詞のない第２活用の「られる」の可能表

現は、4例である。第1活用の動詞で可能の助動詞「れる」を用いたものは「住まわれる」「はかられない」「離されない」「除かれない」「し直されない」「船の通られる」の6例である。この6例は、可能の意味であれば可能動詞になり得ると思われるが、可能の助動詞「れる」で表現されている。

3．4　チェンバレン『日本語口語入門』

チェンバレンも「れる」「られる」を接続して作られる受身動詞に可能の意味があると述べ、さらに¶315では、日本語には、英語なら受身あるいは可能の言い方に訳した方がいいのに、日本語では厳密にいうと自動詞という動詞のグループがあると言っている。第1活用の他動詞の語尾の - u を -eru に変えることによってできた第2活用の自動詞であると説明している。「書ける / 切れる / 溶ける / 取れる / 売れる / 読める」がその自動詞の用例としてあげられている。ここで自動詞と論じている点はアストンの4版の主張と似通っているが、チェンバレンは第1活用の動詞から変形で作られる自動詞、即ち可能動詞としている点が異なる。「見える」「聞こえる」「行ける」については例示せず、「見える」「聞こえる」については、¶319で変則的であると述べている。

¶317では、-eru のついた自動詞、即ち可能動詞と「-areru, -rareru のついた本物の可能形」との違いを説明している。後者が倫理的な可能性（moral ability)、即ち can よりもむしろ may を表す傾向があると述べ、一方 -eru のついた形は物理的な可能性、即ち may よりもむしろ can を表すとしている。これは、説明はより詳しくなっているものの、インブリーのハンドブックの主張とほぼ同じである。

¶320にあげられている用例の中で可能動詞が使われているものは次の通り。

(37) a. Ienai koto wa nai.

‘It can be said, (though in practice people do not often say it)’

b. Kore de wa, totemo ikemasen.　‘This won’t do at all’

c. Dō de mo shire ya shinai.　‘There is not means of knowing.’

d. Mazukŭte nomenai.　‘It is too nasty to drink.’

e. Yomeru ni wa yomemasu ga, - te ga warukŭte, koto no hoka mendō desŭ.

‘Oh! Yes, one can read it; but it is extremely difficult, owing to the badness of the hand writing.’

(37) e は強調の言い方との指摘がある。

3．5　ブリンクリ『語学獨案内』

英語の各文法項目の説明の後、左に英文、右に日本語の文が並んで提示されている。第２編の p.8から ‘can’ の説明がある。全用例を確認していないが、「できる」「わけにはいかない」等様々な可能表現を用いている。可能動詞の用例を以下に示す。

(38) a. マサカ彼人ノ前デハソンナ｢ヲ云出マセヌダツタ

b. 傘ハ何所デ買マスカ知セテ下サヒマセヌカ

c. 向ノ目的ハナンダカ一向私ニハ解セマセヌ

3．6 サトウ『会話篇』

サトウの『会話篇』の例文のうち可能の助動詞「れる / られる」を用いたものと可能動詞を用いているものは以下の通りである。可能の意味かどうかの判断は、添えられている英訳も参考にした。長い用例は、前後を省略し、動詞部分を中心に抜き出している。用例の後の数字は、本文の章と用例番号を意味する。例えば、1.23は、第１章の用例23を表す。

全用例数は34で、元となる動詞の異なり語数は22である。

(39)（参る）Ashita wa mairaremai.　1.23

(40)（売る）

a. Urenai ka.　2.16

b. Uraremasen’.　2.17

c. Uremaen’.　2.18

(41)（買う）

a. Sono nédan dé wa totemo kawaremasen’.[8]　2.27

b. Sono nédan dé wa kaëmasumai.　2.28

(42)（読む）Madzu, kana wo yoku oboëté, mô zun-zun to yomeru kurai ni nattara, 3.21

(43)（覚える）Nakanaka yôi ni oboëraremasumai.　3.43

(44)（申す）

a. Dômo sô wa môsaremasen’.　8.25

b. Ichigon mo môsaremasen’.　8.26

(45)（いる）Sô iwareté dômo damatté iraremasen’,　9.21

(46)（見る）

a. Watakushi-domo ni mo miraremashô ka.　10.11

b. Mirarenai koto wa arumai.　10.12

(47)（知る）Sono koto ga shireru to ôki ni yoi tsugô dé gozaimasu.　10.24

(48)(思う) Dômo sô omowaremasen'. 10.49

(49)(通る)

a. Sayô sa nê; mâ, tegata nashi ni tôrarenai kurai na koto des'kara. 11.24

b. Asoko ni midzu ga tamatté iru kara tôrarenai. 11.26

(50)(歩く)

a. dômo taihen na shito dé tonto arukaremasen'. 16.16

b. hidoi hokori dé soto wa arukemasen'. 23.18

c. Naruhodo, asa no uchi wa kusa no naka wa arukemasen'. 24.56

(51)(行く)

a. H'm, mâ ikeru tokoro madé itté tomari to shiyô. 18.9

b. Danna, sonna ni yasuku ikeru mono ja arimasen. 18.49

c. Ikenakeria chôdo ii; kotchi mo yosô. 18.50

(52)(出す) Shikashi yokei wa kesshité dasenai zo. 18.54

(53)(ひく) donna ji demo jiki ni hikemasu dôri des'. 20.3

(54)(信じる)

a. dômo shinjiraremasen'. 20.31

b. soré wa dômo chito shinjiraremasen' koto des'. 21.5

(55)(堪える) Ika-ni-mo kotaëraremasen'. 22.24

(56)(おる) Samui no dé hi no soba a hanarété wa jitsu ni oraremasen'. 22.55

(57)(持つ) Yubi ga kajikandé fudé ga motemasen'. 22.57

(58)(請け合う) Sayô sa, uké-awaremasen' nê. 23.6

(59)(眠る) samui no dé yo-aké madé shimijimi némurarezu ni shimaimashita. 24.53

(60)(〜つくす)

a. O rei wa môshi-tsukusémasen'. 25.14

b. Shosen oboé-tsukusemasumai. 20.40

上記の用例数を表２にまとめる。第１活用以外の動詞については可能動詞がないため可能動詞の欄には斜線をひいた。( ) 内の数は、各用例のうち「ます」や終止形、「ましょう」で終わる否定表現でないものの数である。否定表現は、「ません」や「ず」、「ない」、打消推量「まい」で終わるものである。

表２　『会話篇』における可能の助動詞「れる / られる」と可能動詞の用例数

動詞	れる / られる	可能動詞	計	動詞	れる / られる	可能動詞	計
参る	1	0	1	おる	1	0	1
売る	1	2	3	持つ	0	1	1
買う	1	1	2	請け合う	1	0	1
読む	0	1 (1)	1	眠る	1	0	1
申す	2	0	2	～つくす	0	2	2
知る	0	1 (1)	1	覚える	1		1
思う	1	0	1	いる	1		1
通る	2	0	2	見る	2 (1)		2
歩く	1	2	3	信じる	2		2
行く	0	3 (2)	3	堪える	1		1
出す	0	1	1	計	19 (1)	15 (5)	34
ひく	0	1 (1)	1				

第１活用の動詞の用例数をみると、可能の助動詞「れる」が12，可能動詞が15である。第１活用の動詞の異なり語数は、可能の助動詞「れる」、可能動詞ともに10である。可能の助動詞「れる」と可能動詞両方の用例を持つ動詞は、「売る」「買う」「歩く」である。可能動詞のみ２例以上の用例を持つ動詞は「行く」と「つくす」である。

可能の助動詞「れる / られる」は19例中18例が、可能動詞は15例中10例が否定表現である。「行ける」は否定表現が３例中１例のみである。

『会話篇』part２の注釈では、(40) a の「売れない」について「売る」の自動詞が可能の意味で用いられているとし、自動詞と助動詞「れる / られる」の可能表現の意味の違いについて、can と may の違いと同じであると述べている。また、(46) a の「見られましょうか」についても、英訳では can で翻訳しているものの、注釈では文字通りの解釈として may を用いている。(49) の「通られない」については、注釈では、可能動詞「通れない」が 'you can't pass' のより正確な表現と述べている。このように、可能の助動詞「れる / られる」を用いた表現の意味と、可能動詞（サトウは自動詞と考えている）の可能の意味の違いについてコメントを残している。インブリーのハンドブックにも意味の違いについて記述があるが、このサトウの主張を参考にしたものと想像できる。

サトウが可能動詞を自動詞としている点については、アストンと同様である。

(47) の「知れる」を本稿では可能動詞の例としてあげたが、(61) のように可能の意味がないと考えられる用例が複数あった。

(61) a. Madzu sôsho de mo taitei hen kamuri no atari wa shizen <u>shireru</u> mono des' kara, soko wo motté hikeba wakarimashô ga, naka ni wa <u>shiré</u>-kaneru ji mo ôku

arimasu kara,　　20.11

b. donna ni yakeru ka shiréta mono ja nai.　12.39

「行く」の可能動詞については、(62) のように可能ではなく禁止や非難の意味を持つ「いけない」の形で使われている用例がある。サトウは2.43の注釈によればこれらも「行く」の可能形の否定と解釈している。

(62) a. Sô negitcha ikemasen'.　2.43

b. Awaa kutté hinomi kara okkochiru to ikenai zo.　12.8

「できる」が可能の意味のあるものは、9例であった。(63) に用例の一部を示す。「ことができる」の用例は (63) d の1例である。

(63) a. Iku nen keiko shitara hanashi ga dékiru yô ni narimashô ka.　3.23

b. nanibun dômo shôchi ga dékinai to môshimashita.　8.21

c. Danna, Kanagawa madé o kago no go sôdan wa dékimasen' ka.　18.41

d. Iya mô, okité té wo arau koto mo dékimasen' deshita.　22.54

「できる」が可能の意味ではなく、(64) のような完成の意味を表す用例もある。

(64) a. Hibachi ni hi wo iréro; so shité gozen wa mô dékita ka.　5.8

b. Oi, oré mo chôdo shitaku ga dékita. Saté, dékakeyô.　18.14

「見える」「聞こえる」の用例も存在する。用例の一部を (65) にあげる。

(65) a. Kikoémasen'.　6.13

b. Kasuka ni miemasu.　10.9

c. Futa iro ni kaité aru yô ni miemasu ga, kono wake wa.　20.4

4　日本語研究・教育資料における可能動詞の考察

アストンは当初、受身に分類しながらも、第1活用の動詞に -eru を加えて作られる可能動詞について指摘していた。しかし、『日本口語文典』3版以降ではそれに触れていない。版を重ねるにつれて、可能動詞についての捉え方が変化している。

アストンの影響を受けているインブリーは、可能を態として考え、第1活用の動詞に対して助動詞「れる」を用いた可能表現と可能動詞を並列して表に提示いることから、可能動詞を活用に基づいて作られる動詞と認識していたと考えられる。馬場辰猪の『日本文典初歩』においても第1活用の動詞の可能表現は可能動詞であり、インブリーのハンドブックは日本人の協力者もいることから、妥当性があるとしてよいであろう。

アストンの『日本口語文典』4版は、ハンドブック初版の後に出版されており、序文に

よればハンドブックもヒントにしたと謝意を述べていることから、改訂にあたってハンドブックの内容について目を通していると想像される。しかし、ハンドブックにあるような生産的な可能動詞の記述がなく、自動詞の範疇で可能動詞を捉えなおしている。

確かに「切れる」「売れる」のように、自他の対応がある他動詞の可能動詞とその他動詞に対応する自動詞が同じ形の場合、それが自動詞か可能動詞かについては、解釈が文脈に依存するため判断が難しい。また、「見える」「聞こえる」を可能動詞ととらえると -eru が含まれているものの、第１活用の動詞からの変形のルールに例外が生じる。当時の可能動詞が限られた動詞で使用されている状況であれば、それほど生産性もなく新しいタイプの自動詞としみなしたほうがよいと判断をしたとも考えられる。

また、『日本口語文典』３版出版の前年1872年に初版が出版されたアストンの著作『A Grammar of the Japanese Written Language with a Short Chrestomathy』（以下『日本文語文典』とよぶ。２版 1877, ３版 1904）も関連がある。『日本文語文典』の p.38から日本語の自動詞と他動詞について記述しており、文章語の「切らるる」と「切るる」を例にあげ、受身形と自動詞を混同しないように注意している。さらに自動詞の多くは、英語の -able/-ible でおわる形容詞で訳されると述べており、受身形に似た可能表現と自動詞の関連性を考慮し始めたのではないかと想像される。アストンの国文法の研究が口語文法の -eru でおわる可能表現の整理に影響を与えたのであろう。

『会話篇』とインブリーのハンドブックの用例の中で、第１活用の動詞の可能の助動詞「れる」を用いたものと可能動詞は、可能動詞の用例数が若干多いものの、異なり語数がほぼ同じであることを考慮すると、同程度に使用されているとしてよいであろう。可能表現の用例に否定表現が多く現れているが、申（2003：97）によれば、江戸語から東京語においての可能表現全体は「肯定形」が目立ってきつつあるものの、打ち消し表現あるいは不可能表現が中心になった否定形がリードしているとの記述に沿ったものと考えられる。「行ける」という可能動詞について、肯定表現が多くみられ否定表現が少ないのは、「いけない」が禁止や非難の意味で用いられているからであろうと考えられる。

「ことができる」を用いる用例がインブリーのハンドブックでは多く見られた。鶴岡（1967）、申（2003）の指摘にあう結果といえる。これは、「ことができる」をもちいる可能表現がハンドブックの can, could の日本語の説明に取り上げられていたこともあろうが、鶴岡（1967）が武家階層でかなり用いられたと述べているように、ハンドブックの例文の作成に関わっていると考えられる井深梶之助[9]が会津の武士階級の出身であったことが関係する可能性もある。少なくとも、「ことができる」を用いる可能表現が宣教師が話す日本語としてふさわしいと考えられていたとはいえるであろう。

5　まとめ

本稿では、明治初期における英米人の日本語研究・教育資料における可能動詞の扱いについて調査した。本稿の調査により可能動詞をどう理解すればよいかについて、明治初期の研究者は次のような考えを持っていたことがわかる。

① 馬場辰猪は、可能動詞を活用表に記載する一方、練習問題から「ことができます」による可能表現の定着を重視していたとみられる。

② アストンは､助動詞「れる / られる」の接続する受身動詞が可能の意味をもつとのべ、当初、第１活用の動詞から作られる可能動詞を受身形の一つとし、受身動詞と同様に可能の意味を持ち、自動詞に近いものであると述べていた。しかし、後に受身形ではなく、自動詞として取り扱うこととした。

③ インブリーは、可能態として、助動詞「れる / られる」が接続した可能表現と第１活用の動詞と第２活用の一部の動詞から作られる可能動詞をあげている。「見える」「聞こえる」を可能動詞としているものの、変形の規則を述べ第１活用のほとんどの動詞が可能動詞をもつとしている。

④ チェンバレンは、アストンと同じく可能動詞を自動詞としているが、第１活用の動詞を変形して作るとしている点はインブリーと同様である。

可能の助動詞「れる / られる」と可能動詞の用例数について『会話篇』とインブリーのハンドブックを調査した。可能の助動詞「れる」と可能動詞は同程度に使用されていたことから、明治初期には、可能動詞と可能の助動詞「れる / られる」を用いた表現は均衡した状態にあったことを反映していると考えられる。

注

（1） ハンドブックの概要については杉松（2018）を参照。

（2） 明治初期の西洋人が記した文典では、第１活用の動詞は、日本語教育文法におけるⅠグループの動詞を意味する。第２活用はⅡグループに相当する。

（3） ４版のタイトルは『A Grammar of the Japanese Spoken Language』

（4）「Oide nasaru kotoga dekimasu」と「Goran nasaru koto ga dekimasu」は敬語の練習としてCXIII 課に出ている。

（5） アストンの語幹は動詞の連用形を意味する。例えば 「食べ」､「聞き」等

（6） ĭの上の記号は無声のマーク。他の例文ではŭも使用されている。

（７） 可能動詞と助動詞「れる」の可能のニュアンスの違いについては、渋谷（1993：103,104）に様々な研究の紹介がある。申（2003：46）は、調査結果から「状況可能」は可能の助動詞「レル」に多く、「能力可能」は可能動詞に多くみられる傾向があるとみてとれると述べている。

（８） ‘é is like ay in pay, e is like e in pen’ との記述がある。用例（42）の ë は、先行する母音とは別に発音されなければならないことを意味する。n’ は、母音がほとんど発音されない nu のことである。é については常磐（2015）に表記の研究がある。

（９） 杉松（2018）に詳細がある。

参考文献

青木博史（1996）「可能動詞の成立について」『語文研究』81

浅川哲也（2018）「江戸時代末期人情本にみられる可能表現において - 後期江戸語における可能動詞の使用実態 -」『近代語研究　第20集』武蔵野書院

大久保恵子編訳（1999）『チェンバレン『日本語口語入門』第２版 翻訳付索引』笠間書院

小木曽智信（2002）「近代語テキストからの可能動詞の抽出 -「太陽コーパス」を例に -」『明海日本語』7

金沢朱美（2008）「馬場辰猪 “An Elementary Grammar of the Japanese Language”- 動詞分類の特徴ならびに出現背景についての考察を中心に -」『日中学術研究誌』２- 1

金沢朱美（2009）「馬場辰猪『日本文典初歩』における練習問題の考察」『目白大学人文学研究』５

金沢朱美（2010）「馬場辰猪『日記』から見た『日本文典初歩』第２版の考察 - 成立および特色を中心に -」『日本語と日本文学』50

神田寿美子（1961）「現代東京語の可能表現について」『東京女子大学日本文学』16

坂梨隆三（2006）『近世語法研究』武蔵野書院

佐々木綾（1993）「可能動詞についての考察」『鶴久教授退官記念　国語学論集』桜楓社

渋谷勝己（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33- 1

申鉉竣（2003）『近代日本語における可能表現の動向に関する研究』絢文社

杉松香苗（2018）「インブリー『Handbook of English–Japanese Etymology』における動詞の分類」『国学院大学日本語教育研究』９

鷊岡昭夫（1967）「江戸語・東京語における可能表現の変遷について」『言語と文芸』54

常磐智子（2015）『英学会話書の研究』武蔵野書院

ブリンクリ（1977）『明治８年語学獨案内』桐原書店・復刻版

三宅俊浩（2016）「可能動詞の成立」『日本語の研究』12- 2

Aston, W.G. 1869. A Short Grammar of the Japanese Spoken Language 1 st ed. Walsh.

渡邊修「アストン「日本語口語文典」- 初版影印 -」『大妻女子大学文学部紀要』14所収

Aston, W.G. 1871. A Short Grammar of the Japanese Spoken Language 2nd ed.. F.d.Finlay and Son.
李長波（2010）『近代日本語教科書選集　第９巻』クロスカルチャー出版 所収

Aston, W.G. 1872. A Grammar of the Japanese Written Language with a Short Chrestomathy. 李長波（2010）『近代日本語教科書選集　第９巻』クロスカルチャー出版 所収

Aston, W.G. 1873. A Short Grammar of the Japanese Spoken Language 3rd ed.. Trübner.
李長波（2010）『近代日本語教科書選集　第９巻』クロスカルチャー出版 所収

Aston, W.G. 1888. A Grammar of the Japanese Spoken Language 4th ed.. Kelly & Walsh.
https://archive.org/details/grammarofjapanes00astouoft/mode/2up

Imbrie, William. 1880. Handbook of English-Japanese Etymology 1st ed.. R.Meiklejohn.
李長波（2011）『近代日本語教科書選集　第11巻』クロスカルチャー出版 所収

Imbrie, William. 1889. Handbook of English-Japanese Etymology 2nd ed.. Z.P.Maruya.
李長波（2011）『近代日本語教科書選集　第11巻』クロスカルチャー出版 所収

Sato, E.M. 1873. Kuaiwa hen, Twenty-Five Exercises in the Yedo Colloquial for the use of students with notes. Lane Crawford
https://archive.org/details/kuaiwahentwenty01satogoog/mode/2up
https://archive.org/details/kuaiwahentwenty00satogoog/mode/2up

Tatui, Baba. 1873. An Elementary Grammar of the Japanese Language with Easy Progressive Exercises 1st ed..Trübner.
https://books.google.co.jp/books?id=SsxhUobU2VcC&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false

Tatui, Baba.1888.An Elementary Grammar of the Japanese Language with Easy Progressive Exercises 2nd ed.. Trübner.
https://books.google.co.jp/books?id=IEBLAAAAIAAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false